

第八章 学校・社会施設の充実

第一節 学校

一、鷺山小学校

鷺山小学校の沿革 鷺山国民学校は占領政策によって戦後六・三制の小学校となった。ここでは国民学校から現在に至るまでの小学校の沿革を表示することから始める。

年	月	日	児童数	校長	こ と が ら
昭和	一六・	四・	一八一	赤塚重次郎	岐阜県岐阜市鷺山国民学校と改称。 大東亜戦争が始まる。
一七・	四・	一八	一八五 五七		

年 月 日	児 童 数	校 長	こ と が ら
一八・四・一	一九九 五〇	棚橋建二	第二次世界大戦（大東亜戦争）終る。 天皇陛下の御写真を奉還。 学校放送設備ができる。 清洲町に住宅営団ができ始めた。 鷺山古川町に市営住宅ができ始める。 岐阜市立鷺山小学校と校名がかわる。
一九・四・一	二七五	藤谷 静	高等科児童及び六年卒業児童は新制中学校に入学。 岐阜市鷺山小学校育友会発足。
二〇・四・一			
二一・三・一七			
二一・四・一			
二二・四・一			
二二・四・一			
二三・二・一	三八一		岐阜県教育委員会指導課の協力校となる。 運動場土盛をPTA会員で行う（一週間）。
二三・四・一	五五七		学校放送設備完成。（六万五千円）
二四・四・一			北舎玄関の東二教室を二階建四教室に改築する。
二五・九・一			一年三学級、他の学年は二学級の計一三学級となる。
二五・一〇・三〇			倉庫改築、運動場整地。
二五・三・二〇	六二二	中村 又一	一・二年は各三学級、他学年は二学級。
二五・四・一			岐阜市教育委員会よりコミュニティスクールとして表彰さる。
二六・四・一	七〇五		

第一節 学

校

七・五	四・一	六・一	四・一	四・二	三・二	八・一	四・一	一〇・一五	四・一	八・二	一〇・一〇	六・三	四・一	三・二	九・二	八・三〇
三七・	三六・	三五・	三四・	三四・	三三・	三二・	三一・	三〇・	二九・			二八・	二七・	二七・		
一、〇一六	九七五	二、四七一	一、一四一		一、一二〇			九五五		七九七		七〇八	六九二			
平	井	新兵衛										内	野	三	男	

給食室を新築。
運動場南西の角に非常用井戸ができる。
北舎四教室を二階建八教室に改築。
PTA母親学級開設。
移動拡声装置増設。
一年生四学級となり、計一七学級となる。
給食室渡廊下できる。
便所増設。
北舎二階建校舎二教室増築。
校地内に鷺山校下公民館完成。
鷺山小学校校育友会は優良PTAとして文部大臣表彰を受ける。
(二一は学級数、九七五は児童数を示す)
ビニールプール完成。

年 月 日	児 童 数	校 長	こ と が ら
三八・四・一	九四三 (二二)	八代順一	公民館への渡り廊下完成。
六・二〇 七・九 八・三〇	九三一 (二二)		放送設備一式更新。 プール完成。 給食室の流し場、パン置場改造。
三九・四・一			給食室プロパンガスにかえる。瞬間湯わかし機、洗浄機購入。 プール用便所完成。 ピアノ購入。
四〇・一・二五	九六八 (二四)		校歌制定。(作詞 島 秋夫、作曲 和田三里) 鉄筋三階建校舎増築(三教室)。 新校舎北に便所増設。 図書館、校長室、事務室ができる。
四一・二・二六 四一・三・一四 四一・四・一	九九二 (二四)		
四二・一・一三 四二・四・一	一、〇四六 (二七)	渡辺 定	鉄筋三階建(三教室)校舎増築(特別教室、理科室、音楽室)。

第一節 学

校

一・一八	九・一六	九・一三	五・二四	四六・四・一	四六・三・二六	四六・二・二〇	四五・四・一	四五・三・一〇	一〇・一五	四四・四・一	四四・一・一〇	四四・一・一〇	四三・四・一〇	四三・一・二四	一・二・一二
------	------	------	------	--------	---------	---------	--------	---------	-------	--------	---------	---------	---------	---------	--------

一、一六六 (二二〇)	一、一三六 (二二〇)	一、一一九 (二二九)	一、〇七六 (二二七)
----------------	----------------	----------------	----------------

土田

勇

運動場南地下道並に児童専用道路完成。 運動場整地完了。 北舎・南舎の側溝排水工事完了。 運動場のサーキットコース完成。	鉄筋三階建北舎増築（三教室と玄関、便所）。 池を中庭へ移転。 公民館への渡り廊下完成。 校長室、放送室改造。 南舎とりこわし。	北舎倉庫新築。 鉄筋三階建北舎増築（六教室）、南舎玄関より東取りこわし。	焼却がま完成。 鉄筋三階建北舎増築（三教室）。	鉄筋三階建北舎増築（八教室）。 体育倉庫新築。
--	---	---	----------------------------	----------------------------

年 月 日	児 童 数	校 長	こ と が ら
四七・四・一	一、一七三 (三〇)		木造校舎玄関と体育倉庫完成。 中庭に兔の自然飼育場できる。 職員室の拡張、校長室の移転、更衣室整備。 北舎鉄筋三階建増築。(理科室・準備室・宿直室、二・三階は普通教室四)
四八・一・二二 三・一七			東・西手洗い場の側壁と屋根完成。
四八・三・三〇 四・一	一、一五六 (三〇)		給食室・校務員室・宿直室、完成。 低学年用プール完成。 ビデオ機械一式PTA寄贈。 動物慰霊塚が児童会にて完成(動物天国)。 校地西側境にフェンスできる。 低学年運動場として諸施設完成。 希望の池できる。
四八・一〇・二 一・二〇 一・三〇 一・二〇			自転車用交通安全サーキット完成。
四九・三・二二 四・一	一、一九三 (三〇)		第二図書室、視聴覚室、郷土室整備。 カラーテレビ五台設置(PTA寄贈)。
四九・四・一 六・一七 七・一八			

第一節 学 校	五三・四・一	一〇・一四
	五三・三・一〇	一・二五
	五二・四・一	三・二〇
	五二・三・三一	四・一
	五二・四・一	六・二七
	五二・二・一六	一〇・二五
	五二・二・一六	一二・一七
	五二・四・一	一・三一
	九・一二	一・一九二
	一二・二・五	(三〇)
	一二・二・五	(三〇)
	一二・二・五	(三〇)
	一・一八四	豊吉茂久
	(三〇)	
	(三〇)	
	(三〇)	

指導用信号機設備（寄贈）。
グローブ、ジャングル、落書きフロア（六年卒業記念）。
中庭便所水洗化工事完了。

カラーテレビ五台、PTAより寄贈。
ウオータークーラー設置、PTA寄贈。
東海三県学校図書館教育読書指導部門で優秀賞受賞。
スベリ台完成。

台風一五号による九・一二豪雨災害。
昭和五一年度、東海三県学校図書館教育奨励賞を受ける。
校歌碑ができる。
南舎中央手洗い場に屋根が取りつけられた。

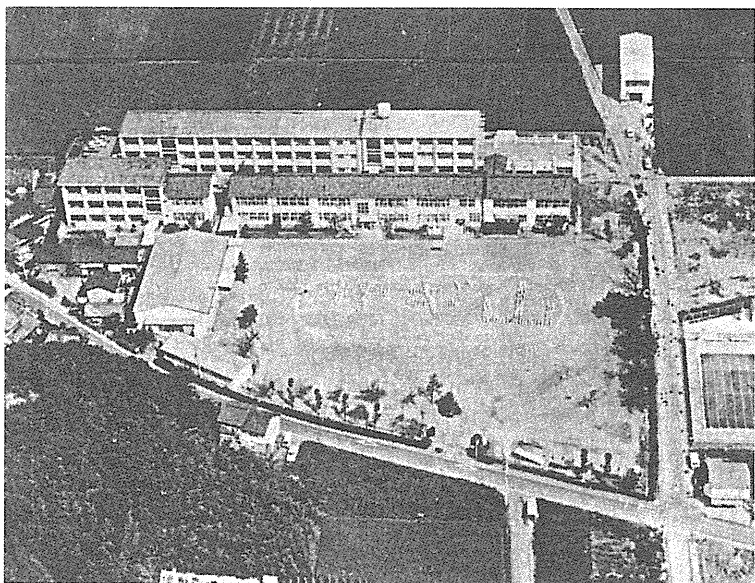
北便所水洗化改良工事と校舎内電気配線工事を行う。
体育館ができる。
鷺山小学校創立八五周年記念式典。
校旗樹立。
PTAより記念文庫寄贈。

年 月 日	児 童 数	校 長	こ と が ら
七・一九 一・二三 五・三一 五・三一 五・四一	(三〇) 一、二〇八 (三〇)		鷺山交通少年団結成。 校地西南隅に鷺山公民館ができる。 南舎ダブル本館完成。
七・一二 八・一三 四・一	一、一七四 (三〇)		北舎給食室階上の二・三階増築校舎完成。 運動場全面整地完了。 教育課程全面改定に伴い、新教育課程完全実施。
七・二三 八・二三 三・三一 五・六		福田基二	プールへの歩道橋完成。 焼却釜改築。 南舎と体育館の間に中庭完成。 特殊学級「しらさぎ」できる。 (二九は学級数、一は特殊学級数を示す)
九・二六 四・一	一、一〇一 (二九) (二)		運動場・便所改築・プレハブ体育倉庫、防球ネット完成。
四・一二 四・一	一、〇六〇		校内テレビ放送設備完成。

五九・四・一	一、〇八〇 (二八)	安藤秀一	財団法人田口福寿会より図書一〇〇万円寄贈。 優勝旗、トロフィー、図書(約四七万円) PTAより寄贈。
六〇・四・一	一、〇三六 (二八)		
六一・四・一	九九九 (二六)	小林芳雄	公民館東側に防球ネット増設さる。 第一ブロック同和教育研究会を行う。 児童用図書(二一七、九一〇円) PTAより寄贈。
六二・四・一	九六〇 (二七)		

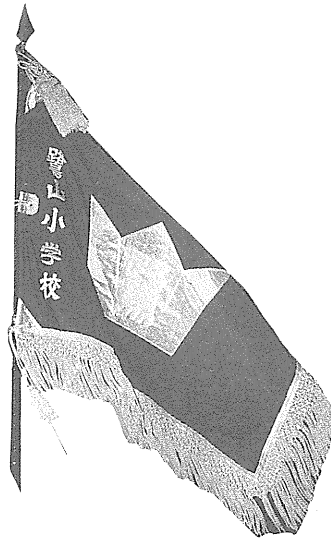


鷺山小学校（昭和36年・鷺山小学校提供）



鷺山小学校（昭和49年・鷺山小学校提供）

校 旗



第一節 学 校

校

鹭山小学校歌

和島 田 三秋 里夫 曲詞

伊吹山は たかいな
青空に そびえているよ
ぼくと わたしの 希望も たかく
どこまでも どこまでも のびるのだ
この学び舎 鹭山、鹭山小学校

鹭山の 城趾にたてば
長良川 清いながれに
岐阜城の 天守は 映えて
つわものの 夢いまいずこ

濃尾平野は ひろいな
はてもなく つづいているよ
ぼくと わたしの ころも ひろく
どこまでも どこまでも そだつのだ
この学び舎 鹭山、鹭山小学校

校歌・校旗 校歌は昭和四〇年九月制定された。作詞者は島秋夫、作曲者は和田三里であった。昭和五一年二月一六日校歌碑が出来た。翌年鷺山小創立八五周年の記念に校旗が新調樹立された。

鷺山小学校創立八五周年記念 昭和五〇年八月は鷺山小学校が創立して、満八五年を迎えた。初代川島校長から一八代豊吉校長まで、それぞれ地域に根ざし時代に沿った教育が行われ、幾多の変遷を重ねて、八五年目を迎えた。その間には幾多の天災・地変と激しく移り変わる世相の中で、伝統ある鷺山の教育を継承してきた。この八五年間の輝かしい業績をたたえ、記念式典・行事を行った。

- 1、八五周年記念誌「さぎ山」の発刊
- 2、鷺山小学校校旗の樹立
- 3、八五周年記念文庫
- 4、歴代校長の写真掲載

歴代鷺山小学校教育目標と研究主題

年 度	教 育 目 標	研 究 主 題
昭和三七年	○がんばりぬく子ども ・よく考えて つくりだす	○カリキュラムの実践と反省 音・図・体・家及び道徳



校歌碑（豊吉茂久氏提供）

昭和三八年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分のことばや行いに責任をもつ ・ 目的を達するまでやり通す <p>○助けあい はげまし合う子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 進んで行く ・ 誰とでも仲よくする ・ 人の意見をよくきく 	
昭和三九年	<p>○ねばり強い子ども</p> <p>○確かな行いのできる子ども</p> <p>○仲よく助け合う子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 最後までやり通す ・ 責任のある行いをする ・ すじ道を通して考える ・ 考えてつくりだす ・ 人の意見をよくきく <p>・ 仲間の仕事は進んで行く</p>	
昭和四〇年	<p>○同 右</p>	<p>○考える子どもを作る学習指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 算数科の学習を足場にした、集団思考のもとになる雰囲気づくり
昭和四一年	<p>○同 右</p>	<p>○同 右</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ よく考え、深く追求する学習態度の育成

年 度	教 育 目 標	研 究 主 題
昭和四二年	<p>○同 右</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ さいごまでやりとおす ・ 強い体をつくる ・ 問題をみつける ・ 考えをつくりだす ・ 人の意見をよくきく ・ 仲間の仕事を進んで行う ・ 責任のある行いをする 	<p>○すすんでつくり出す子どもの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 考えを深める学習態度の確立を目ざす ・ 環境づくりと指導のあり方
昭和四三年	<p>○ねばり強い子になろう</p> <p>○考える子になろう</p> <p>○はげましあう子になろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ さいごまでやりとおそう ・ 強い体をつくろう ・ 問題をみつけよう ・ 考えをつくりだそう ・ 話しあおう ・ 仲間の仕事をみつけてやろう ・ 責任のある行いをしよう 	<p>○同 右</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ つくり出す過程の探究

昭和四四年	○同 右	みんなのしあわせのために、おたがいに助けあいながら、人間尊重のことに徹し、進んで主体的に行動し、たくましく生きぬく児童を育成する ・ねばり強い子になろう ・考えつくりだす子になろう ・はげましあう子になろう ・じょうぶな子になろう	○同 右	・創造性豊かな子どもを育てる ・子どもの実態をとらえる中で、研究の方向を明らかにしていく（仮説）
昭和四六年	○同 右		○同 右	・問題点に立脚した指導を進める（実践）
昭和四七年			○同 右	・問題をたしかめながら、更に指導を深める。（確かめ）
昭和四八年	○同 右	・主体的に行動できる、子どもの育成 ・考えつくりだす子 ・はげまし合う子 ・ねばり強くがんばる子 ・じょうぶな子	○主体的に行動する子を育てる学級づくり	

年 度	教 育 目 標	研 究 主 題
昭和四九年	○同 右	○同 右 ・特別活動を通して
昭和五〇年	○同 右	○同 右
昭和五一年	○同 右	・自分たちの力で問題を解決していく子をどう育てるか ・主体的にとりくませる学習指導
昭和五二年	○同 右	○同 右
昭和五三年	○同 右	○同 右
昭和五四年	○同 右 ・つよくたくましい子ども ・やさしくゆたかな子ども ・かしこくよく働く子ども	○同 右
昭和五五年	○同 右 ・つよくたくましい子ども ・やさしくゆたかな子ども ・かしこくよく働く子ども	○同 右
昭和五六年	つよく やさしく かしこい 子ども	○同 右

昭和五七年	○同 右		○同 右
昭和五八年	なかまの幸せのため力を出し合い、きびしくやさしく、みがき合う鷺山の子の育成	・主体的にとりくむ子を育てる指導	
昭和五九年	○同 右	○同 右	
昭和六〇年	○同 右	・自分なりの考えや感動が持てる子どもの育成 ——わかる、できる喜びをひき出す指導のつみ重ねを通して——	
昭和六一年	○同 右	○同 右	
昭和六二年	なかまのしあわせを願う つよく、やさしく、かしこい鷺山の子の育成	○同 右	

昭和六二年度学校教育計画 昭和二四年から市営住宅、続いて県営住宅が古々川の廃川地に建設されて、往事の川底も住宅地と変わり、鷺山本通り・蟬地区・正木地区には商店がたち並び、道路網も発達し、かつての純農村も次第に市街化してきた。現在では、専業農家は全戸数の〇・三割たらずとなってしまった。校下住民・父母の学校教育に対する期待は高い。しかし、学校と家庭との連携的な教育活動にやや弱さがある。

市街化に伴い、児童数も年々増加の一途をたどり、昭和四五年には、児童数は一、二〇〇余名に達した。以後、横ばい状態を続けてきたが、昭和五六年以降は少しずつ減少の傾向をたどり、現在では一、〇〇〇名をわる状態になった。

その間、校舎の増築、諸設備の改善がなされ、木造二教室を除いて、すべてが鉄筋三階建校舎に生まれ変わった。

こうした地域・学校環境の中に育ってきた児童は、元気に毎日の実践活動にあたっているが、児童にはまだまだ欠点も指摘される。また、年々欠損家庭及び父親の単身赴任の家庭が増加し、家庭環境に恵まれない子ども

1 学校規模（昭和62年度）

郡市名			岐 阜 市		学校名			鷺 山 小 学 校			校長名		小 林 芳 雄		
職 員 数	教 諭	校 長	1	学 校	学 年	1	2	3	4	5	6	特殊 学級	計		
		教 頭	1												
		教 諭	29		学級数	4	4	4	5	4	4	2	27		
		養 護 教 諭	1												
		講 師	-												
	事 務 職 員	栄 養 職 員	1	児 童 数	男	64	86	71	81	86	93	6	487		
		校 務 員	2												
		調 理 員	5		女	72	66	70	102	81	81	1	473		
		図 書 整 理 員	1												
		計	42			計	136	152	141	183	167	174	7	960	

◆教 育 目 標
(学校の教育目標)

なかまのしあわせを願う
つよく やさしく かしこい鷺山の子の育成

(願う子どもの姿)

つよい子

心身ともに健康で主体的に行動し、責任を持って最後までやりぬく子

やさしい子

友だちや自然に対して、温かい愛情を持ち、やさしく思いやりのある子

かしこい子

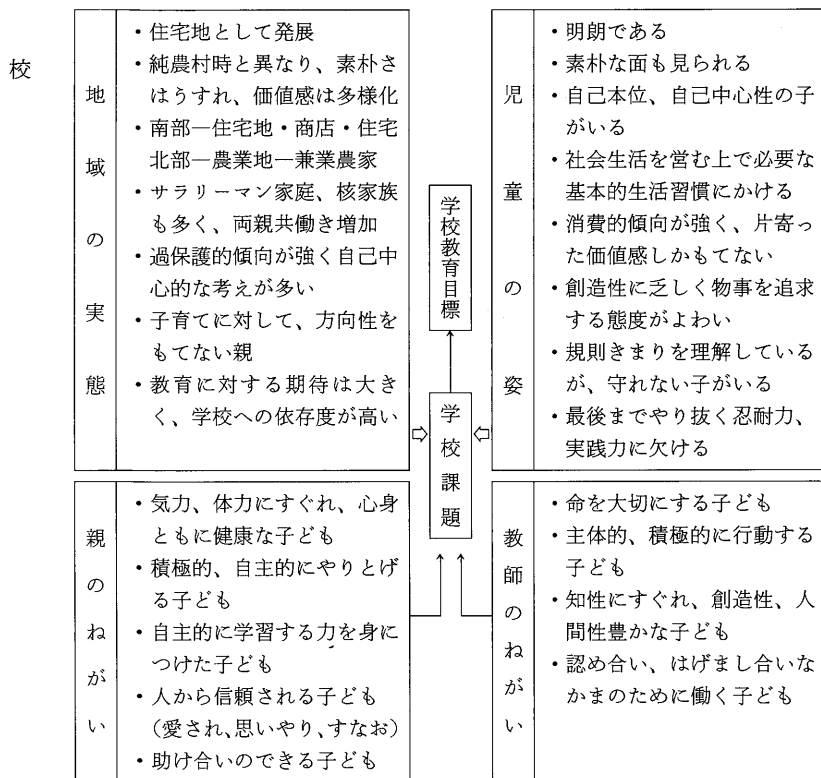
創造力豊かに、真理を求めよりよい考えを選び、行動する子

(具現の方途)

「あ・し・あ・とづくり」を柱に、きびしく、やさしくみがき合う

が増えつつある。こうした児童も含め、生活面だけでなく、精神面でも不安定な子どもが目立ってきている。すべての児童がのびのびとすこやかに育つように、あらゆる角度から指導の手をさしのべていくように、教師の意志統一と家庭との強い連携が必要になってきた。

(実態とねがい)



以上の実態にたつて、鷺山の児童が、自ら実践し己をきりひらく、つよくてたくましい子への成長をねがい、次の三点を課題としてうけとめ、鷺山教育の推進をはかりたい。

(課 題)

1. 自ら目あてを持ち、主体的・積極的に行動し、最後までやりとげる、つよい子の育成
1. たがいに認め合い、はげまし合って、なかまのために、はたらくやさしい子の育成
1. 知恵と創造力を発揮して、文化を生み出す、人間性豊かなこい子の育成

◆学 年 目 標

なかまの しあわせを願う
つよく やさしく かしこい鷺山の子の育成

	つよい子	やさしい子	かしこい子
	心身ともに健康で、主体的に行動し、責任を持って、最後までやりぬく子	友だちや自然に対して温かい愛情を持ち、やさしく思いやりのある子	創造力豊かに、真理を求めよりよい考えを選び、行動する子
〈学年規標〉			
一 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のことは自分でする子 ・外で元気よくあそぶ子 ・すき・きらいをしないでたべる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・なかよくあそべる子 ・しんせつにする子 	<ul style="list-style-type: none"> ・話す人の方を見て聞く子 ・すすんで話す子
二 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてをもって、あそびやうんどうができる子 ・生活のリズムづくりにむく子 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちと仲よく、たすけあえる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・話をさいごまできける子 ・進んで話したり、書いたりできる子
三 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてをもって、運動や遊びと取り組める子 ・きそく正しい暮らしができる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとなかよくし、協力しあえる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の話を最後まで聞き、自分の意見を進んで、はっきり話せる子
四 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ねばり強く、勉強や係活動をやる子 ・運動や遊びに進んで参加する子 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちのことを考えてあげられる子 ・生き物を大切にする子 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで考えを出しあい、よいと考えたことは、最後までがんばる子
五 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・めあてをもって、最後までやりぬく子 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりをもって、声をかけ合う子 	<ul style="list-style-type: none"> ・人の話をよく聞き、考えを出し合う子
六 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のめあてを持ち、達成できるよう努力する子 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だち同志、声をかけあうことのできる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・何をすべきかを考え、行動できる子
特 殊	<ul style="list-style-type: none"> ・仲よく遊べる子 	<ul style="list-style-type: none"> ・やくそくを守る子 	<ul style="list-style-type: none"> ・できるよろこびがわかる子

◎経営の重点と求める子どもの姿

○学ぶよろこびを知る学習指導の追求

- ・ たちがいに、といかけ、といかけられて、みがき合う子
- ・ 自分の考えや感動がもてる子

（わかる、できる喜びをひき出す指導の充実）

○創造的・文化的な実践をめざした児童活動の充実

- ・ 声をかけ合って、なかまと協力し、くらしをよくする子
- ・ 文化的なことに関心を持てる子

○基本的な生活習慣と規律を身につけた行動力のある児童の育成

- ・ くらしの約束を守り、よく考えて、自分のくらしづくりをする子

（社会生活を営む上での基本的な生活習慣の育成）

- ・ 進んであいさつができる子
- ひといに汗して、体づくりや仕事にはげむ子の育成
- ・ 自分の体を知り、体づくりにはげむ子
- ・ ひといに汗して働く子

○明るくて、おもいやりのある人間性豊かな子の育成

- （だれもが大切にされる、なかまづくりのできる子の育成）
- ・ 相手の話が、じっくり最後まできける子
- ・ 相手の心を傷つけないことばづかいができる子

- ・ 差別や偏見、いじめをゆるさない子

研修計画

○研究主題

「自分の考えや感動が持てる子どもの育成」

わかる、できる喜びをひき出す指導のつみ重ねを通して

（三カ年計画）

○ 主題設定理由 本校では、五二年度から八年間「主体的にとり組む子を育てる」を研究主題として、教科・特活領域を通して実践研究を進めてきた。

この研究を基盤に、六〇年度から更に教育目標の具現化のため

・ 鷺山の子ども、すべてを伸ばしていく

・ 鷺山の子どもたちにとって「本当に必要なものは何か」を見きわめていく

・ 本当に必要なものを一年を通して、学年にわたって、確かなものにしていく

・ 本当に必要なものを、鷺山小の全職員の力を合わせて、子どもの身につけていく

の「四つ」を、教師の構えとし、「自分の考えや感動が持てる子どもの育成」——わかる、できる喜びをひき出す指導のつみ重ねを通して——という、研究主題を設定した。研

究をより焦点化・効率化するため、算数科を研究の場とし、三ヶ年計画で、「わかる・できる喜びをひきだす指導の研究」を授業研究を通し進めることにした。

研究内容としては

①単元構成のあり方——内容の配列、一時間・一時間のねらい——（六〇年度）

・単元に関する子どもがすでに習っていることのみまずきを明らかにし、必要に応じて、その手だてを単元構成に位置づける。

・単元のねらいに到達するために、子どものわかり方にそった単元構成をしていく。

②学習展開のあり方——一時間の授業の段階（六一年度）

・本時のねらいを実現するための展開を考える。

・それぞれの学習段階に、子どもが喜びを見出せる活動の展開を考える。

③学習活動の「作品化」を通して

・わかったか、できたか、喜びにつながったかを見つめる。

推進の具体的計画

研究方法

・研究母体は学年

・研究教科は“算数”



鷺山小学校（早瀬写真館提供）

- ・全研・学年研を通して研究を深める。
- ・研究紀要は教師の作品（評価）として残すために作る。
- ・研究推進主題委員会は、研究の構想をたて全体に図りながらより具体化していく。

研究の経過と本年度の研究の重点

- ・初年度の六〇年度は、研究内容①に焦点を当て②・③をかためて、「わかる、できる喜びを持つことのできる」單元構成のあり方を追求し、各学年とも計算領域において、授業実践をくぐらせた指導計画を作りあげた。
- ・二年目の昨年度は、ブロックの同和教育研究協力校として

鷺山小学校歴代教職員 便宜、小学校の設立から現在までを表示した。

- の役目もあって、二・三年が主としてこの推進に当たり、残りの四学年で研究内容②の一時間の授業の段階での学習展開のあり方について取り組み、子どものわかり方によりそった活動の展開を考えた。
- ・本年度は三ヶ年計画の最後の年なので全学年とも研究内容③の学習活動の「作品化」を追求するとともに、三ヶ年間の研究の総まとめの年とする。又、前年度につづいて、ブロックの同和教育研究協力校であるので、同和教育についても更に研究を深める。

鷺山小学校歴代教職員

氏 名		氏 名		氏 名	
一	森崎 勝造（明四・九〇・明三・三）	七	足立 啓吾（明元・五〇・明四・六）	四	安藤 とら（大六・三〇・大八・九）
二	岩佐 尚一（二四・九〇・三三・三）	八	小森 こと（四・三〇・四四・〇）	五	北洞 忠雄（七・三〇・九・三）
三	岩佐 永隆（二四・九〇・三三・三）	九	川島 浅衛（四四・七〇・昭〇・三）	六	川島 鏡一（八・三〇・九・三）
四	川島 佐吉（三三・三〇・元・五）	一〇	矢島 そで（四四・〇〇・大一一・九）	七	井尾 栄（八・九〇・九・三）
五	岩田 広作（三三・五〇・三三・〇）	一一	栗本 米吉（四四・三〇・七・三）	八	後藤まつ乃（九・三〇・九・三）
六	岩佐 尚一（三三・八〇・大二・〇）	一二	安藤とみよ（大一一・〇〇・六・〇）	九	奥田 秀逸（九・五〇・九・三）
		一三	岩佐 忠雄（五・三〇・昭二・三）	一〇	牧田芳太郎（九・三〇・三・三）

氏名	氏	名
三	毛利	じやう(大九三)大三・三
三	津田	忠一(一〇三)二・三
三	河井	ふみゑ(二・三)一四・三
三	山田	時太郎(二・八)一四・三
三	矢島	志孝(三・三)三・三
三	矢島	志子(三・三)三・三
三	森崎	一枝(三・四)一四・三
三	豊吉	三郎(三・三)昭二・三
三	川島	よ志(三・四)三・二
三	市橋	みつの(一四・三)二・三
三	佐守	実(一四・三)二・三
三	興山	桂宗(一四・三)七・三
三	白木	林一(昭二・三)三・八
三	関谷	美雄(二・三)四・三
三	野々村	茂雄(二・三)四・四
三	矢野	静馬(二・四)二・七
三	川島	ひさゑ(二・九)三・二
三	川島	浅衛(三・八)一〇・三
三	堀	真(三・九)五・八
三	高橋	ツタエ(三・二)四・二

氏名	氏	名
四	平瀬	静子(昭三・三)昭六・七
四	北川	勝(四・五)七・三
四	伊藤	平八郎(四・五)三・三
四	吉岡	スナオ(四・二)七・三
四	篠田	浅男(五・九)二・三
四	松野	たまゑ(六・四)三・三
四	山田	トキ(六・四)七・三
四	小野	木正一郎(六・八)七・三
四	西垣	喜美子(七・三)八・三
四	長柄	安子(七・三)一〇・五
四	伊藤	太一(七・三)三・三
四	栗本	一穂(七・三)九・三
四	鈴木	総一郎(八・三)八・二
四	杉下	雪子(八・三)九・八
四	棚橋	稔(八・三)一〇・三
四	林	公子(九・八)九・三
四	河口	敏子(九・〇)九・二
四	田中	正市(一〇・三)三・三
四	飯尾	菊三郎(一〇・三)一四・三
四	佐藤	淑子(一〇・五)三・三

氏名	氏	名
六	酒井	寅三(昭二・三)昭四・三
六	長瀬	久米(二・三)一九・三
六	梅田	源之丞(二・四)三・四
六	田畑	徹(三・三)一四・三
六	安藤	芳(三・三)一四・三
六	大野	左主(三・三)一六・四
六	高島	吾一(三・三)一九・三
六	大竹	隅子(三・四)一五・一
六	小塩	尚夫(一四・三)一八・九
六	正木	清作(一四・三)一〇・三
六	赤塚	重次郎(一四・三)二・三
六	川島	ますよ(一四・三)三・三
六	若山	みきゑ(一五・二)一六・三
六	豊吉	隆之進(一六・四)一八・三
六	西垣	美恵子(一六・三)一八・〇
六	高橋	豊子(一七・八)一八・五
六	福井	田鶴子(一七・九)一九・三
六	伊藤	ちよ(一八・四)一八・五
六	松尾	み津江(一八・五)一九・二
六	川島	鎌一(一八・九)一九・三

二	尾藤正八郎 (昭六・〇) 昭九・三	二〇三	高橋 宮子 (昭三・三) 昭三・三	二五	棚橋 澄枝 (昭五・四) 昭六・七
三	大洞つた江 (九・三) 九・八	二〇四	尾藤 春巳 (三・四) 六・八	二六	小森 幸子 (五・四) 七・三
三	桑原 善吉 (九・三) 九・九	二〇五	大野きくゑ (二・〇) 九・三	二七	富松 幸子 (五・四) 七・三
三	桜井 千津 (九・三) 三・三	二〇六	郷 辰男 (二・三) 三・四	二八	西脇 俊雄 (五・八) 七・七
三	鷺見臣一郎 (九・三) 五・三	二〇七	春日嘉代子 (三・四) 三・八	二九	神山しげ子 (六・二) 四・三
三	村瀬 静夫 (九・三) 三・四	二〇八	藤谷 静 (三・四) 五・三	三〇	真野 一美 (六・四) 七・三
三	平工 栄吉 (九・九) 〇・三	二〇九	須田八重子 (三・四) 五・三	三一	河合 和子 (六・四) 六・三
三	田中 和夫 (二・三) 〇・六	二一〇	長島 映子 (三・五) 六・三	三二	早川 豊 (六・四) 三・三
三	位田 実 (二・三) 〇・七	二一一	安藤 三郎 (三・七) 三・三	三三	長瀬 正子 (六・四) 三・八
三	額額 静子 (二・三) 〇・八	二一二	守田 芳子 (三・七) 三・八	三四	佐藤 房次 (六・四) 七・三
三	伊藤 昭三 (二・三) 二・四	二一三	大里フミ子 (三・三) 二・三	三五	伊藤よし子 (六・五) 三・三
三	児島 益男 (二・三) 二・三	二一四	須田 満雄 (三・三) 九・三	三六	奥村とよ子 (七・四) 七・七
三	棚橋 健二 (二・三) 三・三	二一五	若林 佳 (三・三) 三・三	三七	横山三千穂 (七・四) 七・〇
三	神山 幸子 (二・三) 三・三	二一六	井上イサム (三・三) 〇・三	三八	柳 里子 (七・六) 六・二
三	藤垣まさ子 (二・四) 二・〇	二一七	川島 敏郎 (三・九) 〇・三	三九	伊藤 大策 (七・九) 三・三
三	篠田 勉 (二・六) 三・三	二一八	大野 新 (四・三) 六・三	四〇	有賀 文枝 (七・九) 六・三
三	高橋 一郎 (二・七) 三・一	二一九	早田 静男 (四・三) 九・三	四一	三輪 禮子 (七・〇) 九・三
三	市橋 俊治 (二・三) 五・五	二二〇	稲葉 幸枝 (四・三) 三・三	四二	内野 三男 (六・四) 三・三
三	梅田と志子 (二・一) 七・五	二二一	江崎 元吾 (四・三) 七・三	四三	高田 俊子 (六・四) 六・九
三	林 秀一 (二・三) 五・三	二二二	坪井慶之祐 (四・七) 六・三	四四	青木 鈴 (六・四) 七・三
三	橋詰 宮子 (二・三) 三・三	二二三	中村 又一 (五・三) 六・三	四五	五十川恭司 (六・四) 九・九
三	桑原 一三 (二・三) 三・三	二二四	浅野 藤夫 (五・三) 五・七	四六	今村 閑子 (六・四) 七・三

氏名	氏	名
一四〇	高田 敏子（昭六・四）昭六・六	一四〇
一四一	岩沢 哲江（二六・二）三〇・三	一四一
一四二	田中 瑞子（元・四）三〇・三	一四二
一四三	江崎 なよ（元・四）三〇・三	一四三
一四四	福富 茂木（元・四）三〇・三	一四四
一四五	杉山 歌子（元・四）三〇・三	一四五
一四六	杉本 博（元・四）三〇・三	一四六
一四七	岩崎志津子（元・九）元・三	一四七
一四八	近藤要次郎（三〇・四）三〇・六	一四八
一四九	戸谷まさ子（三〇・四）三〇・三	一四九
一五〇	室 三千子（三〇・四）三〇・三	一五〇
一五一	吉喜 義春（三〇・四）三〇・三	一五一
一五二	橋詰きみ子（三〇・三）三〇・三	一五二
一五三	高橋 文明（三〇・四）三〇・三	一五三
一五四	加藤 宏安（三〇・四）三〇・三	一五四
一五五	橋詰 宮子（三〇・四）三〇・三	一五五
一五六	白井 鶴江（三〇・四）三〇・三	一五六
一五七	山下 光子（三〇・四）三〇・三	一五七
一五八	山本喜久男（三〇・四）三〇・三	一五八
一五九	松野 悦子（三〇・五）三〇・三	一五九

氏名	氏	名
一六〇	小野江津子（昭三・二）昭三・三	一六〇
一六一	白木 淑子（三〇・二）昭三・三	一六一
一六二	勝山 金吾（三〇・四）	一六二
一六三	神山 貞子（三〇・四）	一六三
一六四	村瀬 鈴男（三〇・四）元・三	一六四
一六五	所 一子（三〇・四）四・三	一六五
一六六	野々村法子（三〇・六）	一六六
一六七	中村 雅美（三〇・七）	一六七
一六八	飯尾 幸子（三〇・七）	一六八
一六九	二村 富雄（三〇・九）四・三	一六九
一七〇	篠田 政一（三〇・四）三〇・三	一七〇
一七一	伊藤 秀一（三〇・四）元・三	一七一
一七二	小沼 弘子（三〇・四）四・三	一七二
一七三	酒井と志子（三〇・四）四・三	一七三
一七四	松田ふで子（三〇・四）四・三	一七四
一七五	大橋 勝代（三〇・一）三〇・四	一七五
一七六	国本みよ子（三〇・三）三〇・六	一七六
一七七	若山 明美（三〇・五）三〇・三	一七七
一七八	三浦 義明（三〇・四）三〇・三	一七八
一七九	足立 徳郎（三〇・五）三〇・三	一七九

氏名	氏	名
一八〇	平井新兵衛（昭四・四）昭六・三	一八〇
一八一	橋詰 宮子（三〇・三）三〇・三	一八一
一八二	神谷 信子（三〇・四）三〇・三	一八二
一八三	成瀬 実（三〇・四）元・三	一八三
一八四	島塚 秀男（三〇・四）四・三	一八四
一八五	清水 敏子（三〇・四）四・三	一八五
一八六	近藤 政男（三〇・九）三〇・三	一八六
一八七	端詰 宮子（三〇・四）元・三	一八七
一八八	水野 良平（三〇・四）元・三	一八八
一八九	高橋 彦（三〇・四）	一八九
一九〇	山田 隆夫（三〇・五）三〇・三	一九〇
一九一	山本 孝之（三〇・五）三〇・三	一九一
一九二	町野真佐子（三〇・二）三〇・三	一九二
一九三	遠藤久美子（三〇・二）三〇・三	一九三
一九四	橋 小夜子（三〇・四）三〇・六	一九四
一九五	田仲とみ子（三〇・四）元・三	一九五
一九六	伊藤 美喜（三〇・四）元・三	一九六
一九七	山崎 淑子（三〇・四）三〇・三	一九七
一九八	種田 信子（三〇・四）三〇・三	一九八
一九九	桑原 鈴子（三〇・四）四・三	一九九

三七	鹿島 君子 (昭毛・四・昭四・三)
二六	西垣 歌子 (毛・四・三)
二五	木下仁三郎 (毛・二・三)
二四	宮島 テル (元・四・三)
二三	八代 順一 (元・四・三)
二二	大洞 裕 (元・四・三)
二一	奥野富士恵 (元・四・三)
二〇	小川 浩美 (元・四・三)
一九	武藤 信子 (元・四・三)
一八	伊藤 照夫 (元・四・三)
一七	伊藤 久子 (元・四・三)
一六	道家 春雄 (元・四・三)
一五	都築 滋 (元・四・三)
一四	沢田 昭一 (元・四・三)
一三	内野 健正 (元・四・三)
一二	遠山 輝子 (元・四・三)
一一	松野 弘子 (元・四・三)
一〇	堀口すゑの (元・四・三)
九	臼井 国雄 (元・四・三)
八	深尾美代子 (元・四・三)
七	国枝 務 (元・四・三)
六	玉田 光雄 (元・四・三)

三九	金岩 忠夫 (昭四・四・昭四・四)
三八	鈴木 敏 (四・四・三)
三七	加藤 乃子 (四・四・三)
二六	河口 敦子 (四・四・三)
二五	扇本美穂子 (四・四・三)
二四	田上 一志 (四・四・三)
二三	酒向 敏子 (四・四・三)
二二	岩佐 憲夫 (四・四・三)
二一	伊東 知子 (四・四・三)
二〇	大倉 昭 (四・四・三)
一九	安藤 久子 (四・四・三)
一八	平林 千枝 (四・四・三)
一七	鈴木 是清 (四・四・三)
一六	市川 武彦 (四・四・三)
一五	日比乃里子 (四・四・三)
一四	林 久子 (四・四・三)
一三	渡辺 定 (四・四・三)
一二	佐藤 房次 (四・四・三)
一一	杉浦 智吉 (四・四・三)
一〇	守田 芳子 (四・四・三)
九	平林 千枝 (四・四・三)
八	竹中 悦子 (四・四・三)

三五	神山 武 (昭三・四・昭三・三)
二四	細田 澄子 (三・四・三)
二三	丹羽 清文 (三・四・三)
二二	浅井 満子 (三・四・三)
二一	薫田 滋子 (三・四・三)
二〇	小野 章子 (三・四・三)
一九	石坂 静子 (四・四・三)
一八	山田 治生 (四・四・三)
一七	中村 一成 (四・四・三)
一六	吉田 照子 (四・四・三)
一五	杉本 千代 (四・四・三)
一四	若原みす子 (四・四・三)
一三	瀬木 一枝 (四・四・三)
一二	森 覚 (四・四・三)
一一	角田富美子 (四・四・三)
一〇	林 忠義 (四・四・三)
九	森 堯證 (四・四・三)
八	村瀬 律夫 (四・四・三)
七	加藤 洋子 (四・四・三)
六	臼井 国雄 (四・四・三)
五	堀口 ちよ (四・四・三)
四	平井 和代 (四・四・三)

氏名	氏	名
三三	岡田 昌子（昭四・四）	昭四・三
三七	伊藤 啓子（昭・四）	昭・三
三七	高橋 咲子（昭・四）	昭・三
三七	能勢 貫一（昭・四）	昭・三
三七	五十川美智子（昭・四）	昭・三
三七	川田 徹（昭・四）	昭・三
三七	安田 啓子（昭・六）	昭・七
三八	高橋千代子（昭・六）	昭・七
三八	野々村智恵子（昭・一）	昭・三
三八	沢部 清美（昭・四）	昭・三
三八	藤本 吉三（昭・四）	昭・三
三八	田中 信弘（昭・四）	昭・三
三八	土田 勇（昭・四）	昭・三
三八	山越 節子（昭・四）	昭・三
三八	速水 暹（昭・四）	昭・三
三八	後藤 尋子（昭・四）	昭・三
三八	大塚 信子（昭・四）	昭・三
三八	乾 香代子（昭・四）	昭・三
三八	松野 歌子（昭・四）	昭・三
三八	加藤 康子（昭・九）	昭・二

氏名	氏	名
*三三	加藤 康子（昭四・一）	昭四・三
三三	中村 和美（昭・四）	昭・七
三三	藤井美和子（昭・四）	昭・三
三三	平田久美子（昭・四）	昭・三
三三	村瀬 玉枝（昭・四）	昭・三
三三	伊藤ふじゑ（昭・四）	昭・三
三三	野々田美代子（昭・四）	昭・三
三三	神山 敬一（昭・四）	昭・三
三三	玉木 義巳（昭・四）	昭・三
三三	土田 順子（昭・四）	昭・三
三三	上野 恒子（昭・四）	昭・三
三三	竹本セツエ（昭・五）	昭・六
三三	橋村 健（昭・六）	昭・三
三三	加藤 康子（昭・一）	昭・四
三三	遠藤 道子（昭・四）	昭・三
三三	亀山 幸子（昭・四）	昭・三
三三	梶原 孝彦（昭・四）	昭・三
三三	松田 京子（昭・四）	昭・三
三三	後藤 なお（昭・四）	昭・三
三三	伊佐治和子（昭・四）	昭・三

氏名	氏	名
三三	山口すゞ子（昭四・四）	昭四・三
三三	山下 陸雄（昭・四）	昭・三
三三	山口美代子（昭・九）	昭・三
三三	福田 綾子（昭・一）	昭・三
三三	加藤 康子（昭・一）	昭・三
三三	青木 俊夫（昭・二）	昭・三
三三	加藤 康子（昭・四）	昭・七
三三	後藤 武子（昭・四）	昭・一
三三	平川千鶴子（昭・四）	昭・三
三三	中村 健史（昭・四）	昭・三
三三	小野 久子（昭・四）	昭・三
三三	村瀬 行雄（昭・四）	昭・三
三三	中西庄太郎（昭・四）	昭・三
三三	武藤 公子（昭・四）	昭・三
三三	川島さゝゑ（昭・四）	昭・三
三三	青木 妙子（昭・四）	昭・三
三三	林 竜馬（昭・四）	昭・三
三三	鷺見 哲郎（昭・四）	昭・三
三三	若原 光子（昭・四）	昭・三
三三	豊吉 茂久（昭・四）	昭・三

三三	福田美恵子(昭吾・四、昭英・三)	三三
三三	市原 昇(吾・四、英・三)	三三
三五	毛利 正司(吾・五、吾・三)	三五
*三六	加藤 康子(吾・九、吾・二)	*三六
三七	梅田 鈴子(吾・一〇、吾・三)	三七
三八	大場 桂子(吾・四、吾・三)	三八
三九	沢木 好子(吾・四、吾・三)	三九
四〇	山田 清子(吾・四、吾・三)	四〇
四一	真壁美保子(吾・四、吾・三)	四一
四二	刈谷かへで(吾・四、吾・三)	四二
四三	林 香苗(吾・四、吾・三)	四三
四四	水谷 次郎(吾・四、吾・三)	四四
四五	渡辺 進(吾・四、吾・三)	四五
四六	堀部 鈴子(吾・四、吾・三)	四六
四七	浅野 佳子(吾・四、吾・三)	四七
四八	渡辺 利子(吾・四、吾・三)	四八
四九	加藤 幸子(吾・九、吾・三)	四九
五〇	吉岡 孝子(吾・四、吾・三)	五〇
五一	安田 豊(吾・四、吾・三)	五一
五二	坂本アキエ(吾・四、吾・三)	五二
五三	土居ユリ子(吾・四、吾・三)	五三
五四	杉下喜与子(吾・四、吾・三)	五四

三五	遠山江津子(昭吾・四、昭英・三)	三五
三六	川島 久吉(吾・四、吾・三)	三六
*三七	加藤 康子(吾・八、吾・二)	*三七
*三六	加藤 康子(吾・三、吾・六)	*三六
三九	野村 育子(吾・四、吾・三)	三九
四〇	藤井 練一(吾・四、吾・三)	四〇
四一	中川 常一(吾・四、吾・三)	四一
四二	白井 一登(吾・四、吾・三)	四二
四三	図示 義勝(吾・四、吾・三)	四三
四四	山田 丈子(吾・四、吾・三)	四四
四五	加藤さえ子(吾・四、吾・三)	四五
四六	住友 広子(吾・四、吾・三)	四六
四七	山内きみ子(吾・四、吾・三)	四七
四八	戸崎 洋子(吾・四、吾・三)	四八
四九	市川みどり(吾・四、吾・三)	四九
五〇	小川 泰子(吾・四、吾・三)	五〇
五一	安福 弘次(吾・四、吾・三)	五一
五二	加藤 康子(吾・二、吾・六)	五二
五三	古田 宏子(吾・三、吾・三)	五三
五四	白井 淳美(吾・四、吾・三)	五四
五五	梶井 義隆(吾・四、吾・三)	五五
五六	斎藤満里子(吾・四、吾・三)	五六

三七	横田 鋭子(昭吾・四、昭英・三)	三七
三九	岩原 明子(吾・四、吾・三)	三九
四〇	長屋 幸枝(吾・四、吾・三)	四〇
四一	平田 寿雄(吾・四、吾・三)	四一
四二	藤田 和子(吾・四、吾・三)	四二
四三	加藤 康子(吾・七、吾・三)	四三
四四	相宮 保子(吾・九、吾・三)	四四
四五	原田千代子(吾・一、吾・四)	四五
四六	福田まち子(吾・三、吾・三)	四六
四七	原 淑子(吾・四、吾・三)	四七
四八	日野 悦慈(吾・四、吾・三)	四八
四九	河田 康子(吾・四、吾・三)	四九
五〇	坂 義敏(吾・四、吾・三)	五〇
五一	塚原さと子(吾・四、吾・三)	五一
五二	小枝 信子(吾・四、吾・三)	五二
五三	石田 耀子(吾・四、吾・三)	五三
五四	石原 純子(吾・四、吾・三)	五四
*五五	金子笑美子(吾・四、吾・三)	*五五
*五九	尾藤 春巳(吾・四、吾・三)	*五九
六〇	加藤 康子(吾・三、吾・三)	六〇
六一	石子 裕明(吾・四、吾・三)	六一
六二	福田 基二(吾・四、吾・三)	六二

氏名	氏	名
三九	名和 清	(昭英・四・昭英・三)
四〇	坂口三恵子	(英・四・英・三)
四一	長谷川つや子	(英・四・英・三)
四二	篠田 勝	(英・四・英・三)
四三	所 光子	(英・四・英・三)
四四	大曾根明宏	(英・四・英・三)
四五	高橋 武敏	(英・四・英・三)
四六	太田 普	(英・四・英・三)
四七	三田村玲子	(英・四・英・三)
四八	加藤 康子	(英・四・英・三)
四九	江崎ひろみ	(英・四・英・三)
五〇	原田千代子	(英・四・英・三)
五一	牧田ひろみ	(英・四・英・三)
五二	藤吉 明美	(英・四・英・三)
五三	加藤 康子	(英・四・英・三)
五四	金森 淳子	(英・四・英・三)
五五	堀 純栄	(英・四・英・三)
五六	尾野よしみ	(英・四・英・三)
五七	川島 弘子	(英・四・英・三)
五八	橋詰美智子	(英・四・英・三)

氏名	氏	名
五九	生源寺孝浩	(昭英・四・英・三)
六〇	武山 和子	(英・四・英・三)
六一	丹羽 京子	(英・四・英・三)
六二	西尾 昭枝	(英・四・英・三)
六三	村瀬つね子	(英・四・英・三)
六四	岩原 栄子	(英・四・英・三)
六五	坂下 厚美	(英・四・英・三)
六六	長野さよ美	(英・四・英・三)
六七	野口紀根子	(英・四・英・三)
六八	長屋 好江	(英・四・英・三)
六九	村橋 洋子	(英・四・英・三)
七〇	安藤 秀一	(英・四・英・三)
七一	武藤 清次	(英・四・英・三)
七二	加川よし江	(英・四・英・三)
七三	木村美代子	(英・四・英・三)
七四	田中 一寿	(英・四・英・三)
七五	仲林 保子	(英・四・英・三)
七六	林 淳子	(英・四・英・三)
七七	鈴木麻智子	(英・四・英・三)
七八	柳沢繁満	(英・四・英・三)

氏名	氏	名
七九	森本 修	(昭英・四・英・三)
八〇	犬飼 政子	(英・四・英・三)
八一	梅田まさ子	(英・四・英・三)
八二	林 ひとみ	(英・四・英・三)
八三	安田 昭二	(英・四・英・三)
八四	山口 和子	(英・四・英・三)
八五	森谷 靖子	(英・四・英・三)
八六	矢崎 敬子	(英・四・英・三)
八七	鷺見 英子	(英・四・英・三)
八八	北川 トヨ	(英・四・英・三)
八九	田中 春男	(英・四・英・三)
九〇	小林 芳雄	(英・四・英・三)
九一	鈴木 貞	(英・四・英・三)
九二	足立 凉子	(英・四・英・三)
九三	高橋 照昌	(英・四・英・三)
九四	所 涉子	(英・四・英・三)
九五	郷 甲	(英・四・英・三)
九六	酒井 晃嗣	(英・四・英・三)
九七	川合 孝一	(英・四・英・三)
九八	福地 久子	(英・四・英・三)

四九	洞	繁子（昭三・四）	（ ）	四三	木野村智子（昭三・四）	（ ）	四五	島岡美和子（昭三・四）	（ ）
四〇	服部	謹子（三・四）	（ ）	四三	野々村倫代（三・四）	（ ）	四六	桐山 絢子（三・四）	（ ）
四一	丹羽	尚美（三・四）	（ ）	四四	有賀 永美（三・四）	（ ）	四七	長尾 定司（三・二）	三・三

九・一二豪雨と小学校 昭和五一年九月の台風一七号による九・一二集中豪雨で岐阜・愛知・三重を中心に中部地方は多量の降雨に見舞われた。この豪雨のために、岐阜県下の各地では大きな被害を受けた。鷺山校下では下土居・鷺山・正木地区は鳥羽川・天神川の溢流と内水により、湛水による被害が極めて大きかった。また出水により危険となった地区には避難命令が出され、校下避難場所となった鷺山小学校へ避難した。出水量が多いため長良川の鵜飼舟を始め、木曾川ライン下りの遊船で住民が学校に運ばれてきた。当時運動場には一畝以上の水がつき、避難民を乗せた船が出入りした。広報会・水防団の対策本部が設けられ、学校は各地区から約五〇〇名の避難者を収容した。また校地内にある校下公民館及びそのホールは、床上約五〇坪の冠水となり、大きな被害を受けた。

鷺山小学校歴代PTA役員

昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計	昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計
二 三	藤谷 静	小林 仁三郎	森崎 とめ 田中 君子			三 〇	内野 三男	栗本 賢市	浅野 鉦一 服部 次郎 中島 ふじゑ		
二 四	藤谷 静	森田 礼一	西垣 一左 田中 君子			三 一	内野 三男	栗本 賢市	森瀬 かずゑ 浅野 鉦一 中島 ふじゑ		
二 五	中村 又一	森田 礼一	西垣 一左 田中 君子			三 二	内野 三男	岩佐 茂	吉田 政一 篠田 志づ 北川 勘一		
二 六	中村 又一	北川 勘一	岩佐 さかえ 坂東 武夫 吉田 春			三 三	内野 三男	岩佐 茂	吉田 政一 篠田 志づ 北川 勘一	宇野 みづゑ 三浦 みつ子	林 三門 森瀬 松夫
二 七	中村 又一	北川 勘一	岩佐 さかえ 坂東 武夫 吉田 春			三 四	平井 新兵衛	北川 勘一	石原 良子 上島 妙子 坂東 くわ	川俣 利枝 三輪 はつ子	宇野 俊子 中村 たま子
二 八	内野 三男	岩佐 茂	内田 すゑ子 越智 ふさ子 栗本 賢市			三 五	平井 新兵衛	北川 勘一	石原 良子 丹羽 正子 坂東 くわ	野々村 敏子 久米 爲子	平下 捨吉 野村 隅雄
二 九	内野 三男	岩佐 茂	内田 すゑ子 越智 ふさ子 栗本 賢市			三 六	平井 新兵衛	岩佐 茂	渡辺 美和子 山田 雅子 田中 雅子	田巻 敏子 島沢 きぬ子	桑原 龍子 伊藤 信子

第一節 学

校

昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計	昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計
三七	平井新兵衛	岩佐茂	桑原信	伊藤礼夫	梅村義夫	宮部慶子	清水敦子	森田良一	藤田尚利	昭和四四	渡辺定
三八	八代順一	岩佐茂	渡辺美知子	伊藤義夫		宮部愛子	天野幸子	森田良一	藤田尚利	昭和四五	渡辺定
三九	八代順一	森田良一	藤田尚利	奥田博	天野幸子	松宮栄津子	越川よしゑ	渡部正男	祖父江節子	昭和四六	土田勇
四〇	八代順一	森田良一	鈴木富美子	武藤吉五郎	梅村礼	田中あい子	高田芳子	丹羽智子	井上浩	昭和四七	土田勇
四一	八代順一	井上浩	森川登喜子	北川真澄	煤坂久恵	中川ふみゑ	高田芳子	平野勉	後藤千代子	昭和四八	土田勇
四二	渡辺定	井上浩	山口久美子	武藤吉五郎	後藤千代子	山本和子	越川よしゑ	森崎雪子	平野勉	昭和四九	土田勇
四三	渡辺優	山田	平野勉	番尚子	五味富子	山口久美子	橋田鈴子	江崎義信	伊藤和子	昭和五〇	豊吉茂久

昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計	昭 和	学 校 長	会 長	副 会 長	書 記	会 計				
五 一	豊 吉 茂 久	山 田 和 真	安 達 伸 康	中 島 美 智 子	福 田 ま ち 子	上 田 平 中 公 子	山 服 口 部 末 の 男 ぶ	五 八	福 田 基 二	小 野 欽 也	和 田 保 修	宮 部 悦 弘	村 橋 洋 子	金 尾 藤 恭 子	小 川 沢 田 武 鶴 清 子
五 二	豊 吉 茂 久	山 田 和 真	安 達 伸 康	中 島 美 智 子	福 田 ま ち 子	村 長 瀬 野 中 公 枝 子	毛 服 利 部 正 の 司 ぶ 夫	五 九	安 藤 秀 一	長 谷 保 弘	川 島 武 雄	横 田 弘 行	山 内 正 子	小 沢 藤 春 鶴 子	武 藤 清 裕 次 子
五 三	豊 吉 茂 久	山 田 和 真	山 口 末 男	近 藤 正 子	北 川 道 子	山 村 川 常 照 和 一 子	真 壁 美 保 子	六 〇	安 藤 秀 一	長 谷 保 弘	林 紀 三 男	山 内 正 子	坂 口 美 代 子	荒 崎 裕 敏 子	武 藤 清 次 子
五 四	豊 吉 茂 久	安 達 伸 康	山 口 末 男	北 川 道 子	鳥 村 照 子	武 藤 美 松 常 栄 一 子	真 壁 美 保 子	六 一	小 森 芳 雄	林 紀 三 男	川 本 貞 夫	荒 本 裕 子	森 崎 由 枝	杉 下 武 敏 子	武 藤 清 次 子
五 五	豊 吉 茂 久	安 達 伸 康	武 藤 松 一 子	大 野 恭 一 郎	山 口 末 男	西 沢 常 栄 一 子	森 宮 真 壁 美 保 子	六 二	小 森 芳 雄	林 紀 三 男	川 本 貞 夫	杉 下 か よ 子	島 沢 美 枝 子	後 藤 登 美 枝	酒 後 井 晃 嗣 子
五 六	福 田 基 二	黒 田 千 秋	大 野 恭 一 郎	藤 岡 与 惣 次 郎	武 藤 松 子	西 野 悦 淑 子	花 名 和 村 桂 子	六 三	小 森 芳 雄	林 紀 三 男	川 本 貞 夫	桑 原 な を み	後 藤 靖 子	高 橋 孝 美 一 枝	藤 若 吉 秀 彦
五 七	福 田 基 二	黒 田 千 秋	藤 岡 与 惣 次 郎	小 野 欽 也	西 沢 淑 子	宮 辺 悦 子	名 村 和 洋 清 子								

二、岐阜市立青山中学校

概要 1 青山中の概要 青山中学校は昭和五〇年四月一日、長良中学校より分離・独立し、岐阜市立青山（せいざん）中学校として発足した。学校は岐阜市の北部（岐阜市下土居五四一番地）に位置し、東に金華山、西方はるかに伊吹山を望み、校下は岐阜市立常磐小学校・同鷺山小学校の全域である。

開校以来、人間尊重の精神を基調としてきている。ひとりひとりの生徒が学ぶことの充実感を獲得しながら、未来に開かれた自己の実現することをめざしている。そして生涯を通して、ひたむきに努力する生徒の育成をねがい、その実践をすすめてきた。

そのために、地域に根をおろした中学校教育のあるべき姿を見極めながら、教師の創意のもと充実した教育活動を求め、独自で主体的な研究実践も試みている。さらに、県下の教育向上に貢献したいというねがいも含めて、研究発表会をおこない、その成果を発表してきている。

校名の由来 昭和四九年本校の校舎建築が始められるときは、長良第二中学校（仮称）といった。地元の各種団体の代表を中心に長良中から分離・独立することを何回となく協議し、農地の買収については地主の格別の協力があつた。特に校名については地元広報連合会長、岩佐茂（鷺山）・竹村総右衛門（常磐）を中心にして校名を熟慮し、「青山^{せいざん}」と称することを内定し、教育委員会が承認をした。

「青山」にこめられた願いは、常磐の松の青さと鷺山の山をとってつけたもので、「人間いたるところ青山あり……」というにふさわしい土地がらをあらわしたものである。市内中学校のうち広報会名をとっていないのは青山中学校だけで

ある。

青山中学校の沿革

昭和五〇年度

四月一日 岐阜市立青山中学校創立

研究主題 生活を創りだす力を育てる教育課程

九月一日 入校式

昭和五一年度 研究主題 ひとり立ちする子どもを求めて

七月一日 プール竣工式

一〇月二三日 校歌制定(作詞・平光善久 作曲・兼田 敏)

昭和五二年度 研究主題 自ら学びとる生徒をめざす学級の

指導

十一月一日 第一回研究発表会(研究紀要No.1)

昭和五三年度 研究主題 自ら学びとる生徒をめざす教科の

指導

十一月二五日 中間まとめの会

昭和五四年度 研究主題 自ら学びとる生徒をめざす教科の

指導

— 学びがいのある授業の創造 —

一〇月二六日 第二回研究発表会(研究紀要No.2)

昭和五五年度 研究主題 自己実現をめざす生徒の指導

— 礎・クラブ・道徳指導のあり方を求めて —

十一月一日 中間まとめの会

昭和五六年度 研究主題 自己実現をめざす生徒の指導

— 礎・クラブ・道徳指導のあり方を求めて —

一〇月二三日 第三回研究発表会(研究紀要No.3)

昭和五七年度 研究主題 (県教育委員会指定進路指導実験学

校) 自己実現をめざす進路の指導

— 教科・学級・道徳指導を通して —

二月 三日 中間まとめの会

昭和五八年度 研究主題 (県教育委員会指定進路指導実験学

校) 自己実現をめざす進路の指導

— 教科・学級・道徳指導を通して —

十一月 九日 第四回研究発表会

昭和五九年度 研究主題 ひとりひとりに学ぶ充実感をもた

せる教科の指導

十一月二四日 中間まとめの会(I)

昭和六〇年度 研究主題 ひとりひとりに学ぶ充実感をもた

せる教科の指導

十一月 九日 中間まとめの会(II)

昭和六一年度 研究主題 ひとりひとりに学ぶ充実感を持た

せる教科の指導

— 確かな課題を持たせる授業の創造 —
一〇月三十一日 第五回研究発表会

校地及び校舎

○校地 面積 二万四一四二平方呎 (七三〇三坪)
建物敷地 九三二一平方呎 (二八一九・六坪)
運動場 一万一三九三平方呎 (三四四六・四坪)
その他 三四二八平方呎 (一〇三七坪)
テニス・バレーコート、地下六〇呎掘下げ、完全排水可能にされている。

○校舎 構造、鉄筋コンクリート二階建 (南・北舎二階大廊下、体育倉庫も含む)

面積 五三七五・三五平方呎
室数 五二・五室

CR二〇室、特別教室二〇室、
管理室等一二・五室

着工 昭和四九年七月一五日
完成 昭和五〇年七月一五日

○体育館 構造 鉄筋コンクリート平家建 一部二階
面積 一階 一一三四・〇〇平方呎

二階 一四六・二二平方呎
計 一二八〇・二二平方呎

着工 昭和四九年一月八日

完成 昭和五〇年七月一五日

○事業費

総事業費 一四億二、五四一万二、二四八円
校地買収造成 七億八、二三五万七、〇〇〇円
校舎建設 四億四、八四三万一、〇〇〇円
体育館 一億〇、八二九万〇、〇〇〇円
備品 四、三七八万五、六〇〇円
その他 (工事) 四、二五四万八、六四八円

○業者 校舎関係 (財団法人岐阜市開発公社)

地質調査 川崎設備工業㈱

設計監理 ㈱岬建築事務所

本体工事 内藤建設㈱

電気工事 内藤電気㈱

衛生工事 ㈱松波水道ポンプ工業所

杭打工事 大同工業㈱

体育館関係 (財団法人 岐阜開発公社)

設計監理 富士建築設計㈱

本体工事 ㈱土屋組

電気工事 竜美電気㈱

○植樹 (第一回)

本校校地にはじめて木らしきものが植えられたのは、昭和

五〇年六月木材青壮年会より寄贈のあった「アメリカかえで」で二五〇本を時の戸本貢教育長と共に植えたときである。

岐阜市公園課の指導で岐阜市の植樹祭が昭和五〇年四月一二日本校でおこなわれた。そのときランド正面のクスの木、西間の松、南側の桜、南舎北余の南側のヒバなどを生徒が植えた。

また北舎・南舎間の中庭（東西三〇呎・南北七呎）の芝生園は地元河野力雄（庭石・庭土）、川島松生（松・さつき）などの協力により作ったものである。向って右側（松・石）は山を、左側（ケヤキ）は里を表わすものである。

○卒業記念園（第一回卒業生による）

昭和五〇年度卒業生二四四名の寄贈による記念園が昭和五一年三月一二日完成、卒業生の命名により「希望の庭」と称する。

○観測園、温室（昭和五一年三月一五日完成）

観測園は風向測定、風力測定、雨量測定、地中温度測定、最高最低気温測定、

温室、楽焼作業場、彫塑台

○プール（NK鋼製プール） 昭和五一年七月一五日完成。

工費約三〇〇万円。鋼製プールは岐阜市内の学校では岐

阜北高校に次いで二番目に作られたもので、附属設備も完備している。

○美術科彫塑台 昭和五一年三月五日完成

○校歌碑（第二回卒業生寄贈）

卒業生二三八名、昭和五二年三月九日完成

○東校門（第三回卒業生寄贈）

昭和五三年三月四日完成

青山中学校歴代校長と生徒数

初代 堀 重孝	昭和五〇・	三〇五五・	三
二代 村瀬誠一郎	昭和五五・	四〇五八・	三
三代 小倉 徹	昭和五八・	四〇六一・	三
四代 船戸正美	昭和六一・	四〇六二・	一〇
五代 深尾勝夫	昭和六二・	一一一（現在）	

青山中学校生徒数

年度	一年生(人)	二年生(人)	三年生(人)	合計(人)
五〇	二四五	二二六	二四四	七二五
五五	二八六	二五三	二七六	八一五
六〇	三一六	二八一	二八七	八八四
六一	二九一	三二二	二七七	八九〇
六二	二六七	二九六	三二四	八八七

2 学校課題と学校教育目標

- ・常に課題をはっきりさせて学習に立ち向かい、自ら学び続ける自己の確立をねがい、学ぶ充実感を体得させる。
- ・仲間のよさを認め合うと共に、互いに厳しくみがき合い、自分たちの文化をつくり出していくよるこびを体得させる。
- ・自ら適切な進路を選びとれるよう望ましい勤労観や職業観にうらうちされた生き方を求め続けさせる。
- ・心身共にたくましい体力づくりをねがい、進んで忍耐強く運動にとりくみ、健康で安全な生活を求め続けさせる。

経営課題

- ・常に生徒に密着し、生活事実と背景を連想的にとらえ、自己の生き方に迫る指導にあたる。教科部会・指導部会・学年会等で実践を交流し合って共通の理念を求め、共に自己

3 研究主題

一人一人が生き生きと学習する教科の指導

主題設定の理由

私たちは、開校以来学校教育目標を「生活をみつめ、みずから創り出す生徒」と設定し、「自己実現をめざす生徒」——自ら学びとる生徒——を願い、その指導のあり方を求めて実践

昭和六二年度 青山中学校教育計画

一、学校規模

職員数		生徒数		学年	
校長一	事務職員一	学級数	女	男	年
教頭一	校務員二				
教諭三	給食調理員四	六	二	三	計
養教一	図書整理員一	七	一	五	八
講師一	計四	八	四	三	六
		二	二	二	八

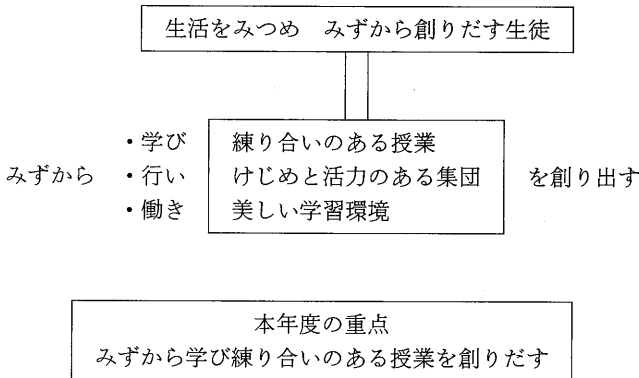
そして、その研究実践を通して、生徒の変容を見出したり、生徒の中に充実感を持たせたりすることが、少しずつではあるができてきた。このことは、学ぶ意欲を喪失している生徒に焦点をあて、指導することの確かさを証明したともいえる。つまり、どの生徒も根っこでは「わかりたい、できるようにになりたい」と願っているのであり、教師がそれをいかに信じ、彼の願いをはばんでいる要因を除去していくかということこそが、重要なのだということを示したものである。

しかし、生徒の中には、まだまだ学ぼうとせず、充実感を手にし得ない姿があることも事実である。基本的な学ぶ姿勢においても、まだ不徹底な面も見られる。そして、生徒全体の傾向として学ぶ意欲（主体性）にとぼしいという反省点があげられてきている。

こういった成果と反省点に立ち、もう一步教科の指導への研究を進め、主体性に結ぶ充実感を求めようとするために、上記のような主題を設定した。

なお、研究は、教科指導だけでなく、学ぶ基本は学級集団にあるという考えから、学級づくりの面もあわせて考えていくことにした。

学校教育目標



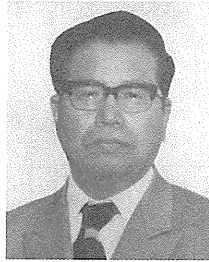
青 山 中 学 校

第一節 学

校



青山中学校々章
昭和50年制定



第一代
堀 重孝校長



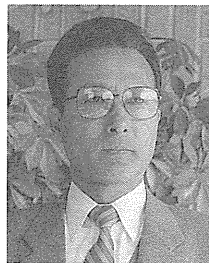
第二代
村瀬誠一郎校長



第三代
小倉 敏校長



第四代
船戸正美校長



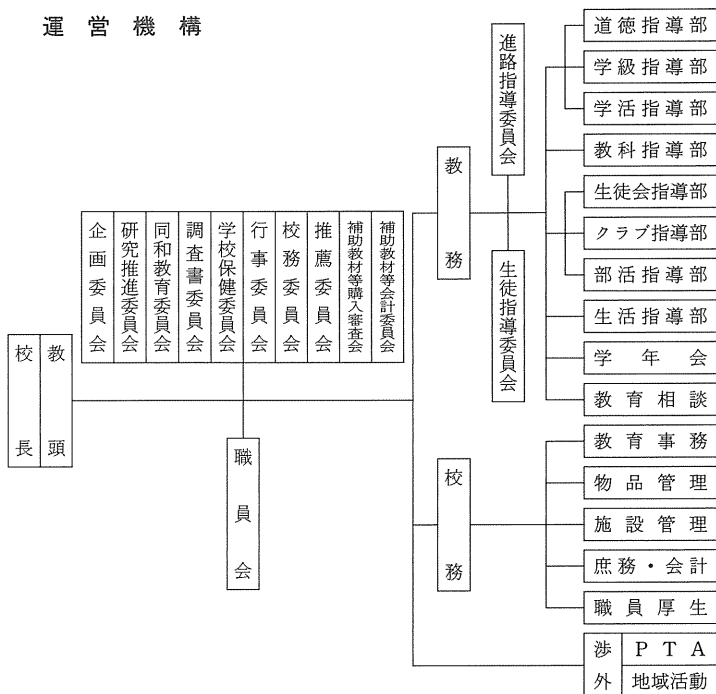
第五代
深尾勝夫校長



昭和50年制定

作詞 平光善久・作曲 兼田 敏

運 営 機 構



青山中学校（天野敬也氏提供）

三、島 中 学 校

開校・校名・校区の変遷 昭和二年、国の学制改革により六・三・三・四制が施行され、全国に新制中学校が誕生した。同時に、従来は義務教育が小学校六年間であったのが、小・中学校の九ヶ年に延長された。

島中学校は、昭和二年四月一〇日、谷澤武夫初代校長が任命され、岐阜市立第八中学校と命名された。当時の岐阜市内には一中から八中まで八つの中学校が設立された。

開校式は、同年五月三日、岐阜市立中学校（現在の県立岐阜北高等学校）講堂を借りて、午前九時より挙行された。

開校時の概要は、職員数、校長一・職員一四・使丁一、生徒数、一年三〇七名・六学級、二年二〇五名・四学級、三年四八名・一学級計五六〇名・一一学級編成であった。校区は、島（当時は早田・城西を含む）・則武・木田小学校下全域と鷺山小学校下の約半数が指定された。

学校が開校したものの、校地の決定が遅れ、校舎や運動場もなく、一年生は全員市立中学校の講堂をつい立て間仕切りした間借り教室で、二年生は島小学校二学級、則武小学校二学級ずつに分かれ、三年生は島小学校にと、全校生徒がそれぞれに間借り仮教室で授業が開始された。

こんな不自由を忍んでの開校一年四ヶ月間であったが、昭和三年八月三十一日、学校再配置に伴い、島小校下の早田地区と、則武小校下の新田地区生徒・一七三名が金華中学（現在の伊奈波中学校）へ、鷺山小校下東地区生徒五四名が長良中へ、転校離別式を行ない、同数の机・椅子を持って引率引渡をした。

校名も同日付をもって、岐阜市立島中学校と改名された。学校長も同日付を以って、岐阜市立岐阜商業高校へ転出さ

れ、石橋準一・二代目校長に替わった。

学校再配置による校区は、島小校下（早田地区を除く全域）則武小校下（新田地区を除く全域）木田小校下全域、鷺山小校下（旧鷺山地区を除く正木地区全域）となった。

昭和三年八月、現在地、岐阜市則武向上り戸に、待望の木造二階建の新校舎が落式した。

しかし、全校生徒が一堂に会したと言うだけで、特別教室もなければ運動場も川原同然で、現在のような恵まれた学校の形態は何一つ見当らなかったが、それなりに中学生になった誇りを持って、よく頑張り抜いた。

同年一〇月一日には、新校舎落成祝賀式、祝賀会、展覧会、青年相撲大会等がそれぞれ盛大に催され、続いて、二日には、落成祝賀大運動会が開催され、島中学校誕生の喜びを噛みしめた。

体育系クラブ活動での校風昂揚 開校当時の島中学校は、運動場も体育施設・設備も全く不自由な状態であったが、学校の周辺は、大自然に恵まれた良い環境であった。生徒等はそのような環境を生かして、体育系クラブ活動には熱心に取り組み、厳しい練習にも耐え抜いて、スポーツに青春を燃やし続けた。

鳥羽川の堤防で走り続けた成果は、第一回岐阜市中学校陸上競技大会に優勝し、続いて中学校駅伝大会にもずば抜けた力を発揮した。

サッカー部は、北高グラウンドで高校生のプレーを見て練習した成果が現われ、市内中学校で一・二位の成績を挙げた。野球部は、たまたま川島紡績正木工場よりユニホーム一式を寄贈いただいたのを契機に充実したチームづくりが出来た。

水泳部も、小さい時から水に親しみ慣れて育った為に、プールを借りて練習すると、練習成果がぐんぐん上って、市

内中学校で常に優位をしめた。

台風・豪雨の度毎に浸水 島中学校は早田川が鳥羽川に流入する合流点に位置した為、よく浸水した。草創時代の校舎は、木造二階建てであつたから、左記の台風や豪雨の度毎に、床上浸水・屋根瓦飛散等の大きな被害に悩まされ続けた。

昭二四（一九四九）六、二一、デラ台風、浸水、瓦飛散
二五（一九五〇）九、三、ジェーン台風、浸水、瓦飛散
二六（一九五一）七、一五、豪雨の為浸水
二八（一九五三）八、一、突風の為瓦飛散
三三（一九五八）八、二六、豪雨の為床上浸水
三四（一九五九）八、一三、豪雨の為浸水
三四（一九五九）九、二七、伊勢湾台風、床上浸水、瓦飛散

このような、度重なる災害に当って、一四代育友会会長栗本賢一（正木出身）は、育友会活動として苦勞の一端を次のように記している。

「伊勢湾台風・豪雨の為、学校南側排水路が氾濫し堤防の一部が決壊、校庭一面は白海化し甚大な被害を被つた。市当局へ強く陳情し、翌年四月より五月までに堤防の復旧工事、南門の橋も補強された。

三五年四月二一日市当局へ校舎の改築と今後の水害対策等陳情、五月一四日にも市役所と県土木出張所（当時は梅林の

昭三五（一九六〇）八、一三、台風一二号床上浸水
三六（一九六一）六、二七、豪雨床上八八号浸水
三六（一九六一）九、一六、第二室戸台風、瓦飛散
三九（一九六四）九、二五、台風二〇号床上浸水瓦飛散
四〇（一九六五）九、一〇、台風二三号浸水瓦飛散
四五（一九七〇）六、二九、豪雨浸水
四七（一九七二）七、一二、豪雨浸水

元憲兵隊跡）へ水害対策について陳情、五月二三日市当局へも陳情、五月二六日校舎増築の件で松尾吾策市長の私宅へ、朝六時三〇分に訪問陳情。続いて、市教委教育長にも依頼に行く。

島中学校下全員の水害対策に関する陳情書を市当局へ提出する事になり、六月六日に陳情書を取りまとめ、六月一四日

に市当局へ署名簿を提出した。

七月六日、岐阜市教委教育長・土木課員が測量に来校、翌七日市役所へ陳情に行く。

八月一三日の一二号台風により再び甚大なる風水害を受け、早速学校へ駆けつけたが、鳥羽川の樋管堤防下の排水路

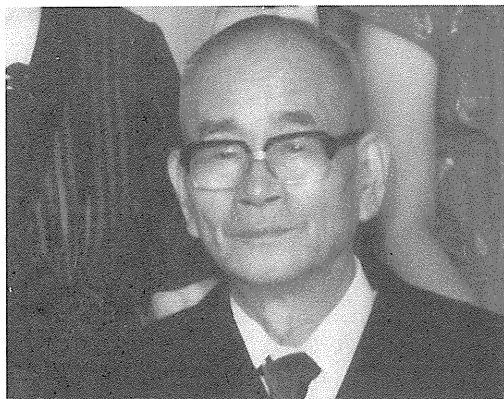
が北へ約一〇呎決壊、校舎全部に浸水、職員室へ行くにも、床上五〇センチ程あり、ズボンを脱ぎ、堤防より給食室から入り、会議室・裁縫室を通ってようやく職員室へたどりついた。先生方が大切な本や重要書類を机の上や高い棚の上への移動作業で実に悲惨な状態であった。

早速島中水害対策協議会を設け、八月一七日市当局へ陳情、九月一三日水害対策協議会開催、九月一六日午前六時又松尾吾策市長宅へ再び陳情に行く。

一二月五日・二二日と二回水害対策協議会開催、一二月二六日市当局へ陳情、



9・12島中の水害（高田隆氏提供）



第八中学校 谷沢武夫先生（島中学校提供）

以上のような実態と苦勞によって、文部省・東海財務局・市教委等関係機関の配慮により、島中学校の鉄筋コンクリート建校舎は、すべて異例の下駄ばき校舎建築の運びとなった。

青山中学校独立迄に、七、九三四名中四三八名の鷺山校下の中学生が島中学校を巣立った。

島中卒業生数一覧表 青山中
独立迄

国 生	年 度	卒業者数	鷺山校下 卒業者数
1	22	42	7
2	23	81	6
3	24	209	12
4	25	183	23
5	26	187	11
6	27	233	14
7	28	162	12
8	29	188	25
9	30	235	21
10	31	241	7
11	32	225	16
12	33	209	18
13	34	217	22
14	35	175	17
15	36	200	14
16	37	303	15
17	38	334	22
18	39	290	20
19	40	284	19
20	41	280	22
21	42	291	20
22	43	267	14
23	44	295	14
24	45	287	6
25	46	307	6
26	47	317	9
27	48	376	11
28	49	362	7
29	50	381	11
30	51	386	12
31	52	387	5
計		7,934	438

四、長良中学校

六、三、三制の発足 昭和二十二年三月、教育基本法・学校教育法が公布され、当時占領軍政下にあった日本の教育制度は、従来の複数系統から六・三・三制に改められることになり、中学校三ヶ年は義務教育となった。

学区と校舎については、最初一校案を決定し校舎と経費の関係から出発は八校とした。当地区は

第七中学校 長良、常磐、鷺山

であった。

第七中学校の新設 昭和二年三月三十一日付法律二六号により設

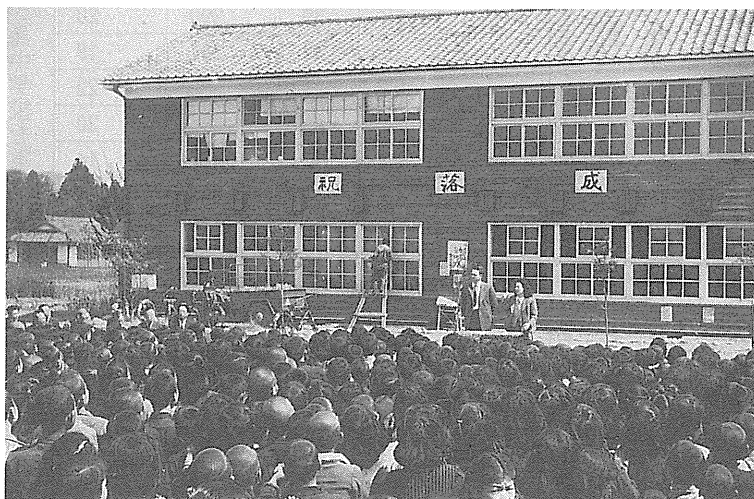
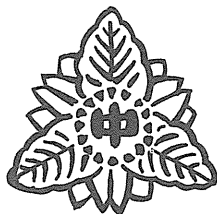
置された、岐阜市立第七中学校は昭和二年五月三日、岐阜市長良西後町の当時岐阜市立商業学校舎を併用し、新任職員は船渡校長以下一五名、生徒一年七学級三三七三名・二年三学級一五四名・三年一学級四七名、合計一一学級五七四名で発足した。一年生の一部は長

校章



開校当時は井げたにペン先をあしらい七中と入れてあった。その後中学校の教育も軌道にのりそれぞれの特色を持つようになりその学校独自の名称と校章を持つようになったのは昭和二三年の六月であった。

現在の校章は葉桜を図案化したものである。三方に広がっている葉と花びらは長良中学校の教育のシンボルともいうべき知性と情熱と健康を意味していると伝えられている。



昭和24年当時の長良中学校（船渡真吉代氏提供）

良小学教室を借用し、三年生は市立商業学校の夜間教室を借用して開校した。

かくて「学習指導要領」が出され、基本的人権を尊重し、平和と自由を愛する人間の育成を確立する教育が始められた。

占領軍・軍政部よりトライアウトスクールとしての指定をうけ、本校へは軍政部から多くの助言者が度々来校し、その都度アドバイズをした。内でもガスタフソンは学校を訪問すること約一回、生徒でもその名前を知らない者がいないほどであった。またデビエス、大佐ヤングなども顔を出し、一年間に多く学校訪問をした。

鷺山校下の中学生 前述のように一先ず第七中学校は学区と校舎が定められたものの、実質的には鷺山校下の中学生は昭和二三年一学期終了式まで第八中学校に登校していた。

当時のことは戦後の混乱時代で、教育制度の改革も大きく、次のようではなかったかと思われる。

一、第七中学校は岐阜市立商業学校の間借りであり、かつなお長良小学校の教室まで間借りで教室がせまかった。

一、通学に要する時間が第八中学校（当時は岐阜市立中学校で現在の岐阜県立北高等学校）が近い。

一、行政指導

このような事情もあったのではないかと思われる。

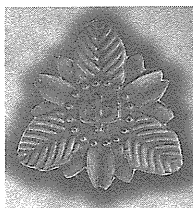
当時第八中学校は、五月一七日設立岐阜市立中学校（現在岐阜県立北高等学校）に間借、本部校舎として講堂を借り、一年生は島小学校分室に、二年生は則武小学校に、三年生がそれぞれ間借をして就学していた。当時の新任校長は谷沢武夫で、教員は一六名であった。

また、学校運営の後援会長（後育友会）として、木田校下の山田治一がなり、昭和二三年度（昭和二三年三月一五日卒業）卒業生は校下で四二名、その内鷺山校下出身は女生徒七名が含まれていた。

鷺山校下の父兄の陳情 昭和二三年八月二〇日岐阜市長良西後町より岐阜市長良福光二六九五番地（現在地）にあった岐阜市立女子高等学校が総合高等学校になり、その空校舎に第七中学校は八月一四日に校名を岐阜市立長良中学校と改称し、八月二〇日に移転して来た。そこで、鷺山校下の父兄は岐阜市長・教育長に長良中学校に編入を強く陳情した。結果、岐阜市立女子短期大学の教室の一部を間借し、九月一日より鷺山地区の中学生も岐阜市立長良中学校に転入することになった。

歴代学校長（青山中分離まで）

発令年月日	氏名	前 任 地
昭和二年四月一日	船 渡 吉 郎	加納第二小学校長
昭和三年四月一日	福 手 政 雄	伊奈波中学校長
昭和四年四月一日	林 弘 司	梅林中学校長
昭和三年四月一日	高 橋 茂 一	岐阜市社会教育課長
昭和四年四月一日	土 井 光 郎	岐阜県教育センター



長良中学校生徒歌

昭和二二年度に生徒歌制定

野 田 満作詞
森 田 勲作曲

- 一、野に太陽はふりそそぎ
長良ガ丘の友とわれ
ふるさとの土耕しつ
誠の草の種まけり
見はるかすもの清さにて
われら光の中に立つ
- 二、野に太陽はふりそそぎ
長良ガ丘の友とわれ
希望の丘をいくたびか
手をたずさえて越えゆけり
けわしき旅の中にして
われら光の道を行く